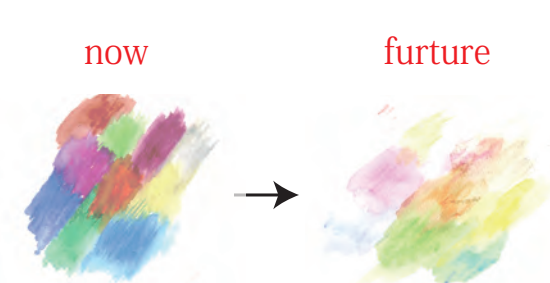


都市の茶の間

—集落的建築群—

Concept

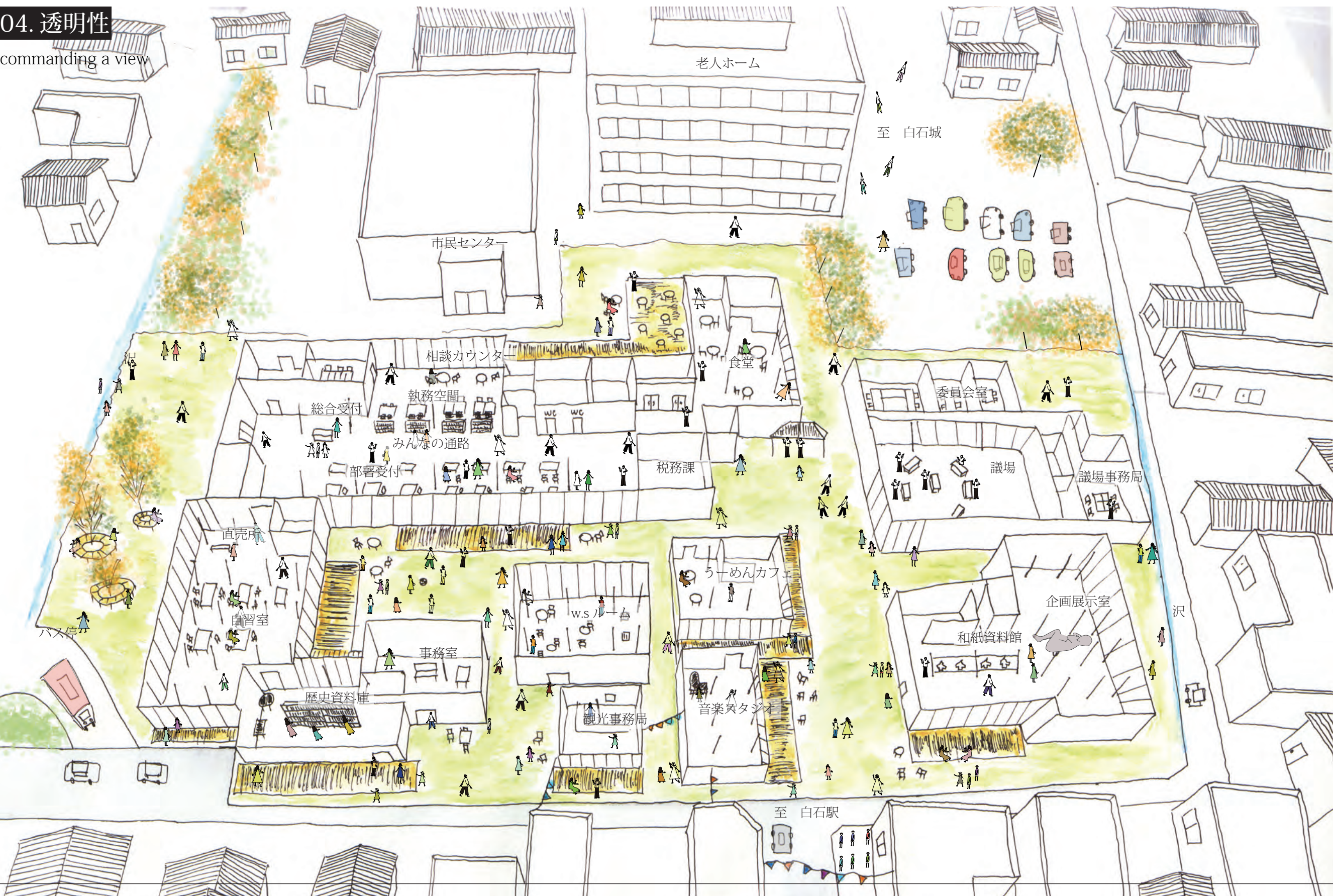
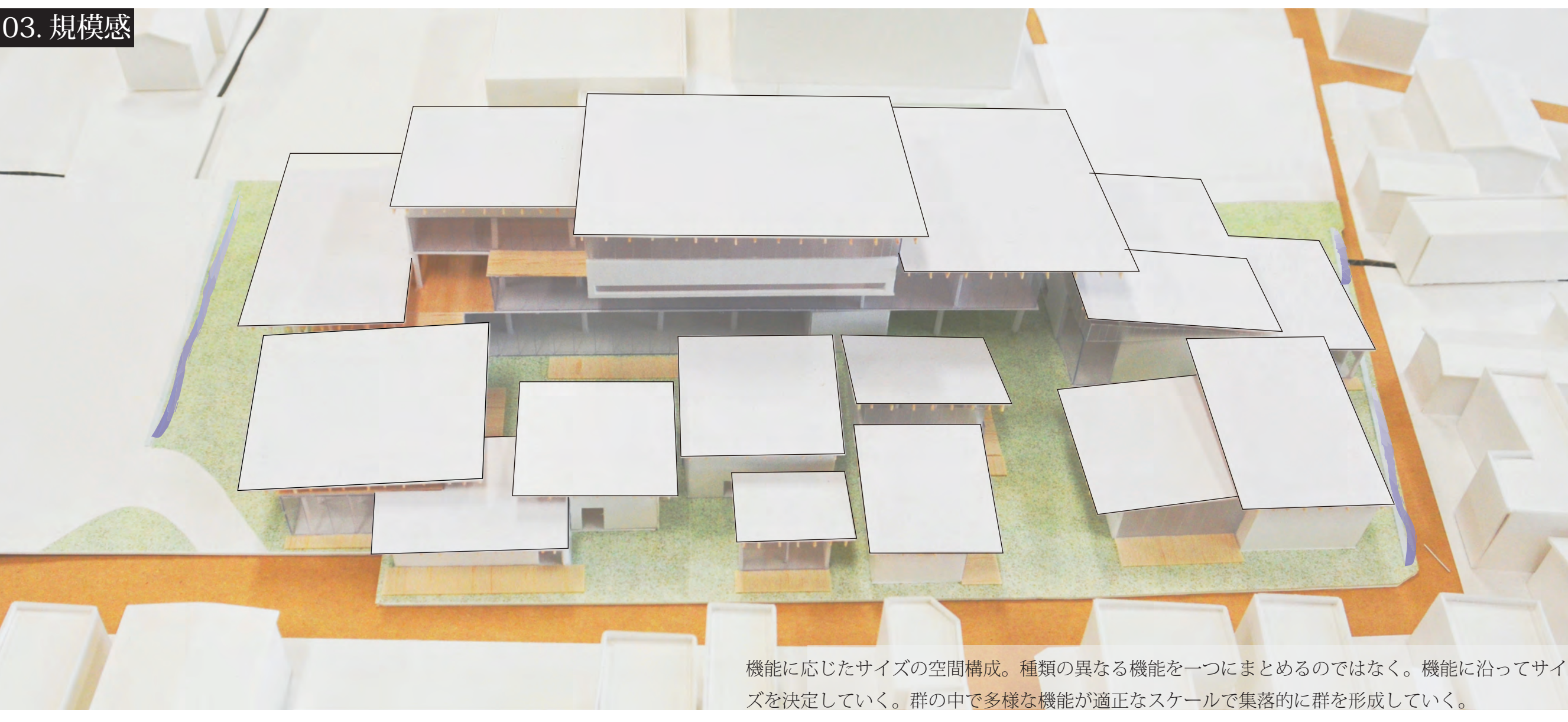
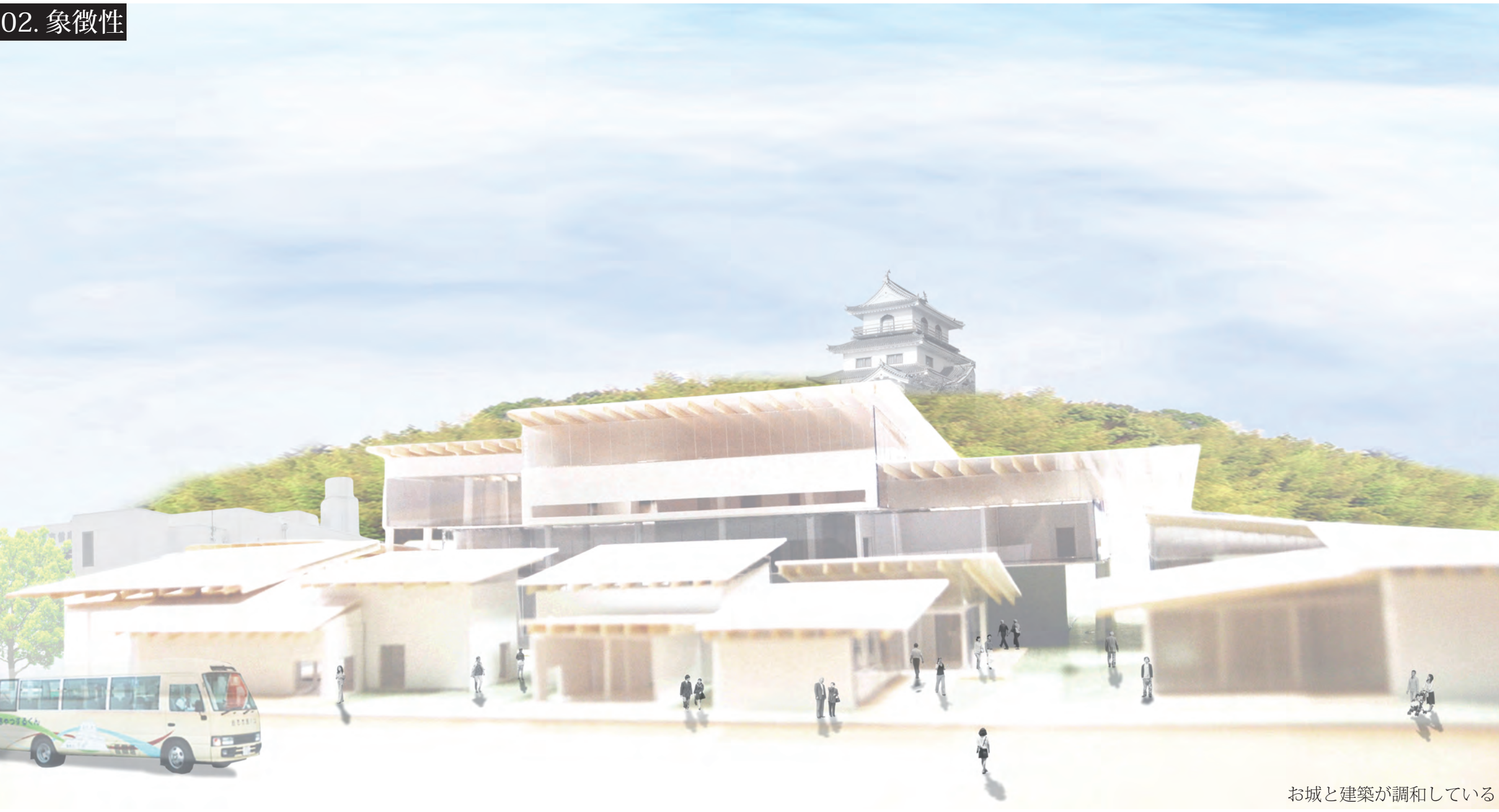
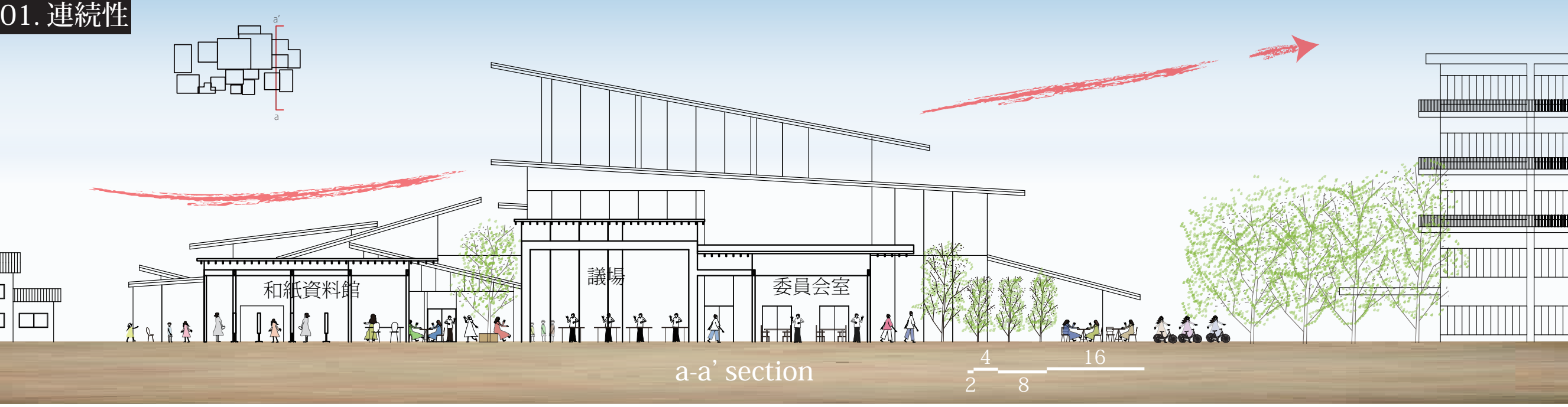
宮城県白石市は、市内多くの専門的な公共施設が多く存在するが、都市の中に広範囲につながりが無い状態で点在し、そこで行われる活動や出来ごとを多くの市民で共有できる空間が乏しい。本設計の大きな目的は、「都市の中のみんなのもの」という様な、日常的に寄り付きやすく市民で共有している意識を持てる公共建築を提案することである。



公共施設の機能を補填し、複合化させる。建築が世代・地域の枠を超えた人々の中心となることで、祝祭的なコミュニティを形成する。



Design diagram



Site

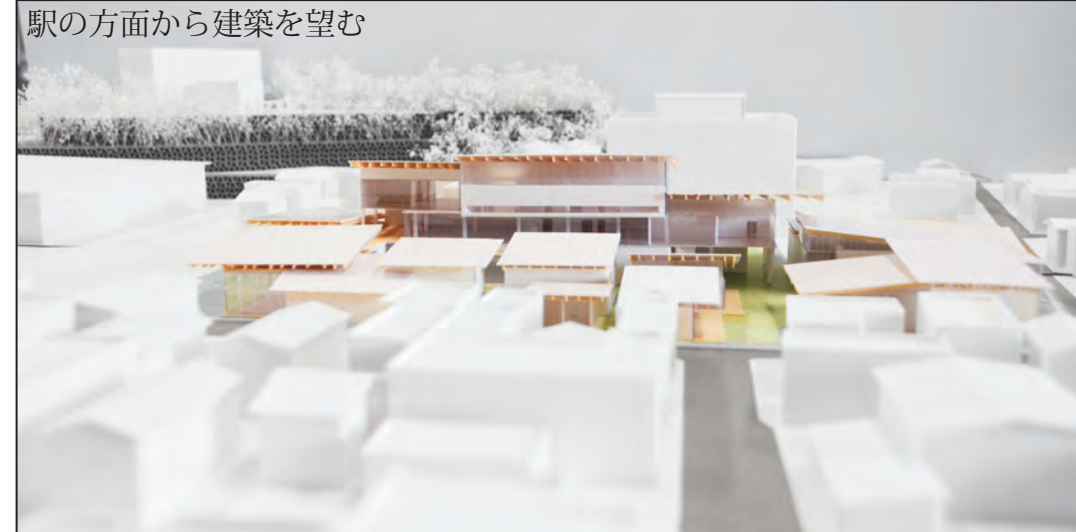
既存の市庁舎とお城の関係



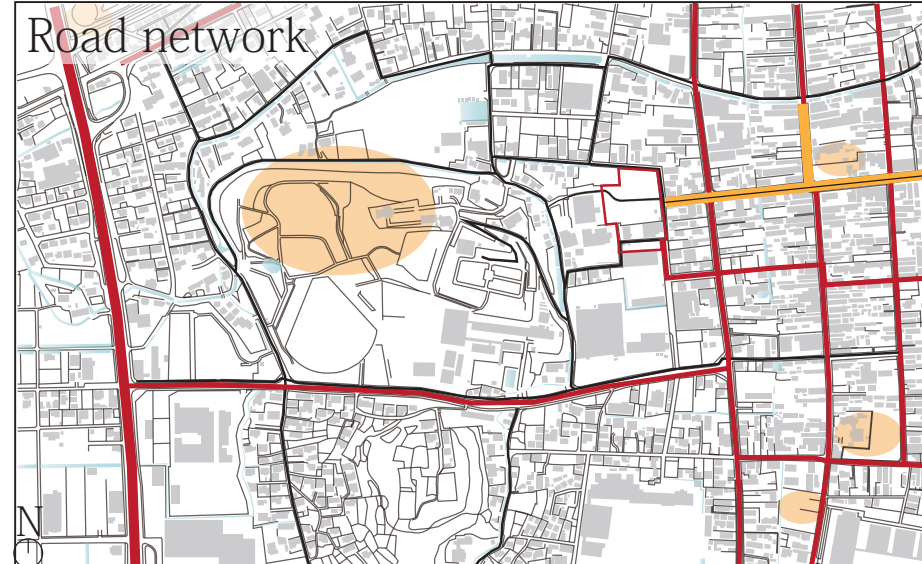
盆地で平坦に住宅街が広がる中で、現市庁舎は連続性がない状態である

城下町の名残が残る都市のなかで、現在は権威主義的で浮いた存在としてある市庁舎。

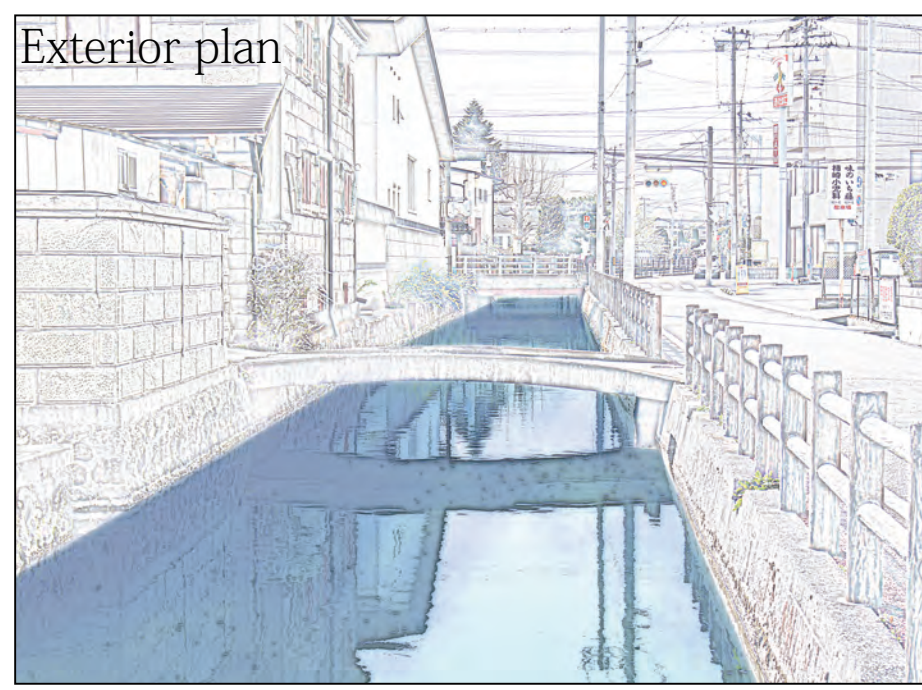
老朽化に加え震災の影響もあり、庁舎の立て替えの想定に際して、都市の中に埋もれてしまっている伝統産業の「見える化」、市内に点在している公共施設を補完する機能を複合した「適度な集約とのつながり」、また城下町であった既存の路地や沢・広場などの「スケール感と空間構成」などの、都市の表す「要素」の集合を作る。



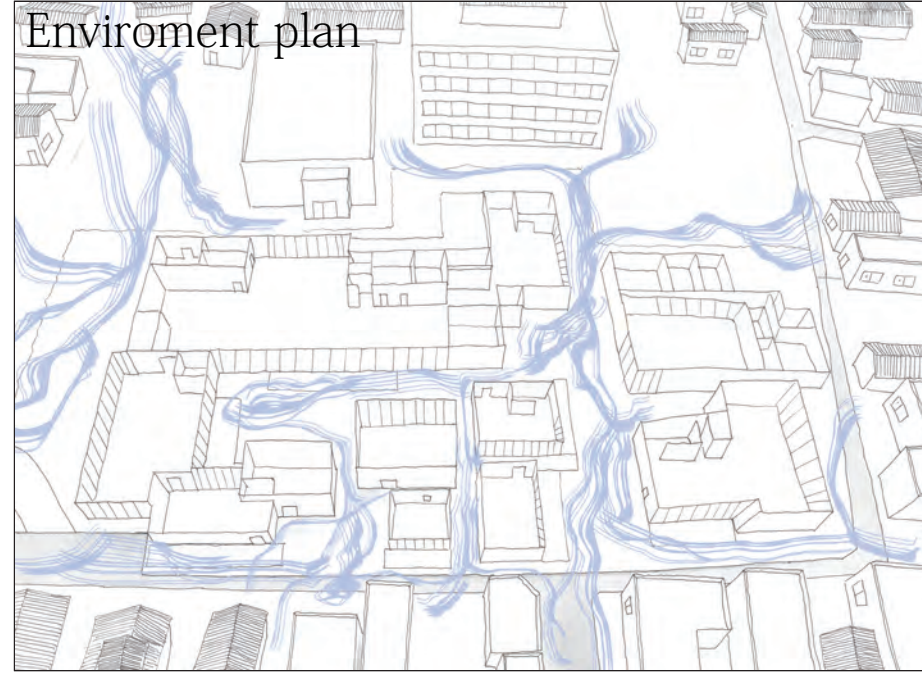
都市の中心市街地からお城へのビスタ方向に建築を配置し、景観的・デザイン的に都市と調和させる。市庁舎が都市のどこからでも視覚化されることで、象徴性を生む。



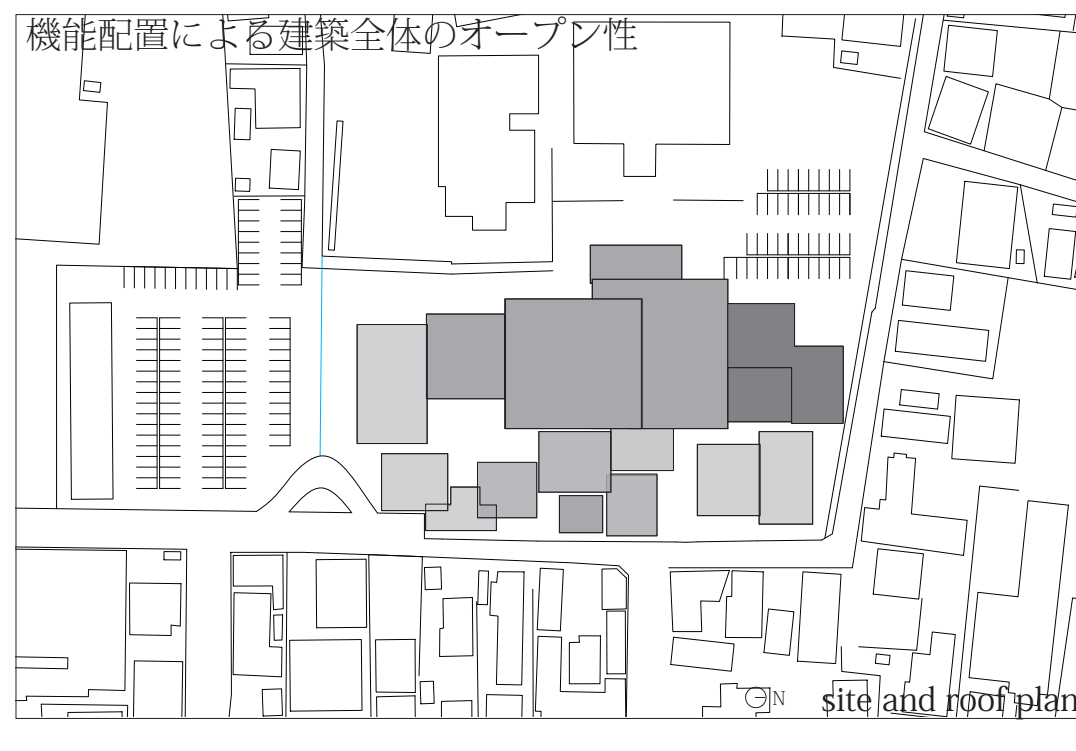
幅員が狭い道が多くあり、住宅同士の密度感による街路のスケール感が白石市特有のものである。都市の街路のスケール感や、点状する広場から分棟の隙間のヴォイド空間を形成した。



「城下町に現存する沢」既存の市庁舎によって、周辺の埋められてしまった沢を整備し、都市の原風景を継承していく。城下町らしさを残しながら、プッファゾーンとなることや、子供たちが沢で遊ぶといった。アクティビティが起こり、建築と都市を緩やかにつなげていく。



「蔵王おろし」一年を通して、山からの吹き下ろしで夏は北東から冬は西から強い風が吹く。その風向きから建築を分棟配置していく。周辺に対してもビル風を引き起こさない。また、夏は風が抜ける隙間。反対に冬は囲われて風が入らないセーフティな隙間になる操作を行う。



色が薄いものは公共性が高く、濃いものは市庁舎などの閉じた機能が入る。異なる透明性の機能が段階的に配置され、市民のアクティビティが全体に展開することで、建築全体がオープン化していくようにする。市庁舎自体も日常的市民が集う寄り付きやすいものとなる。

